

『黄鶴樓』 崔顥

唐代随一と絶唱された「黄鶴樓」

黄鶴樓 崔顥

昔人已乘白雲去 昔人已に白雲に乗じて去り

此地空餘黄鶴樓 此の地空しく餘す黄鶴樓

黄鶴一去不復返 黄鶴一たび去って復返らず

白雲千載空悠悠 白雲千載空しく悠悠

晴川歴歴漢陽樹 晴川歴歴たり漢陽の樹

芳艸萋萋鸚鵡洲 芳艸萋萋たり鸚鵡洲

日暮郷關何處是 日は暮れて郷關何れの處か是なる

煙波江上使人愁 煙波江上人をして愁しましむ

意解

(伝説によると) 昔の仙人はずでに白雲とともに黄鶴に乗って去り、今、この地にはただ空しく黄鶴樓がそびえているばかりである。

仙人が描き、それに乗って去ったという黄鶴はそれっきり帰って来ず、白雲のみが千年前と同じようにゆったり浮かんでいるばかりである。

(樓から眺めると) 晴れ渡った川の対岸にある漢陽の町の樹木もはつきり望まれ、また芳しい草が盛んに茂っている。

る鸚鵡洲も近くに見える。

(ただ自分は漂泊の身) 日暮れになると故郷はどの方角にあるのだろうかと思われ、夕靄が立ち籠める長江の風情が私を無性に悲しませる。

評判悪しき作者の青年時代

七〇四?〜七五四。汴州(今の河南省開封県)の人。七二三年に進士に及第し、監察御史として河南節度使の幕下に入り、山西省北部にも赴任し軍旅の生活をよく詩にした。三十八歳ころから尚書省吏部司勳員外郎(従六品上)で官を終わっているが、そのほか詳しいことは分からない。酒、博打、放蕩の青年時代を送り、軽薄な人物評がある。しかし晩年は一転して風格も備わり凜とした作品を多く残している。

「黄鶴樓」に見る三つの逸話

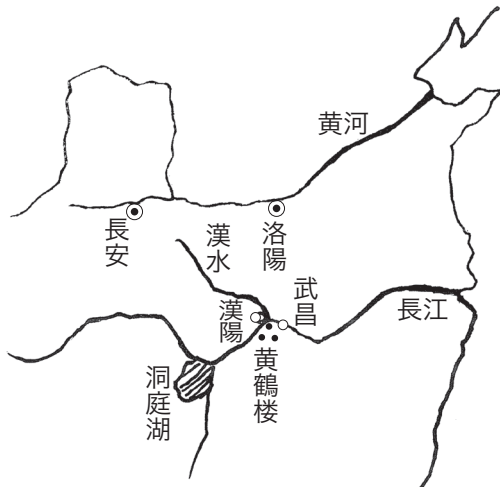
▽その一 「黄鶴樓」と仙人の伝説

昔、この地に辛という主人が商う酒屋があった。毎日のように老人が来ては無銭で酒を飲んで行くが主人は嫌な顔もせず飲ませていた。半年ほどして老人は酒代と言って橘の皮で黄色の鶴を壁に描いた。ところがその鶴が客の歌に合わせて踊り出すというので評判になり、店は大繁盛し、辛は巨万の富を築いた。十年後、老人が再来し、笛を吹く

と白雲が湧き起り、彼は白雲とともにその鶴に乗って飛び去った。辛はお札に記念の楼を立て「黄鶴樓」と名付けたという。(B2-1参照)

▽その二 鸚鵡洲に秘められた悲話

後漢末の禰衡なる人はある要人の紹介で三国時代の覇者魏の曹操に仕えたが、禰衡の傲慢な性格のため曹操を怒らせ、荊州(今の湖北省襄陽)の大守劉表という人物に預けられた。ここでも厄介者にされた衡は同省の大守黄祖に身柄を移された。ところが祖の息子射にたいそう気に入られ、衡をある宴会に侍らせた。その席で射はある人から祝賀として鸚鵡を贈られた。衡はこれはめでたいことだと即座に「鸚鵡の賦」を作って奉った。見事な出来栄で人々は衡のまたとない才能を褒め称えた。しかし素行が収まらない彼は、後日長江の船上での宴席で黄祖を罵ったかどで死罪と



なり、この中洲に葬られた。そこで地の人々は憐れんでこの洲を「鸚鵡洲」と呼ぶようになった。(出典「二統志」) 作者崔顥はこの悲運の人に自分を重ねたのではなからうか。彼もまた若い頃から博打と酒が好きで、さらに美人好みで飽きっぽく妻を四、五回も変えたという。官位も従六品と言えど中程度であり、むしろ進士に及第した者としては陽の目を見なかった身分である。世間に入れられない性格と天賦の才能の持ち主に共鳴するものがあつたのではないかという鑑賞も成立つ。

▽その三 李白も脱帽した名作「黄鶴樓」

宋の嚴羽が「滄川詩話」の中で「(黄鶴樓の詩は)唐人の七律の詩、当に此れを以て第一と為すべし」と述べているように第一級品であることには間違いない。同じ宋の敬優孝の「唐詩紀事」には「李白が後に黄鶴樓を訪れた時『眼前に景あれども言ふを得ず。崔顥の類詩上頭に在り(もつとも優れている)』と記している。その後李白は追放の身ながら金陵の鳳凰臺を訪れた時に崔顥に対抗しようとして七律を作っている。その「鳳凰臺」をみると(B1-2)首聯が「鳳凰臺上鳳凰遊、鳳去り臺空しくして江自ずから流る」で始まり、一方「黄鶴樓」では「昔人已に白雲に乗じて去り此の地空しく余す黄鶴樓」とあり、両者とも懐古的背景・

情景・趣きがきわめて類似しており、また「白鷺洲」と「鸚鵡洲」の地名を織り込んだ構成の仕方、そして尾聯ではどちらも故郷に思いをよせ、しかも「人をして愁しましむ」の同表現。まさに崔顥の「黄鶴樓」と二重写しになっている。崔顥を越えることができなかつたと言う李白の一面を見るようである。

現在の黄鶴樓

現地を訪れた会員は多いと思いますが、敢えて記します。黄鶴樓は湖北省武昌市の長江と漢水が合流する地点の河畔にあり、小高い丘（蛇山）の上に立つ五層の樓で、日本の五重の塔を五・六倍太らせたような大きな建物である。屋根の反りが文字通り鶴の羽根を広げたようになっている。写真によく見る現在のものは一九八五年に完成され、六代目か七代目で、それとは全く外観の違う過去の樓の模型が一階に陳列されている。高さは五十一メートルありこれまでより最も高くてもまた大きい。コンクリート製でその一階には土産物屋があり、見上げると崔顥のこの詩が陶器製の大きな壁画として描かれているのが迫ってくる。最上階まで登ると長江を展望することができる。エレベーターも付いている。漢陽の町は対岸にあるというから、あのあたりだろうと見当はついたが、鸚鵡洲らしいものは眼前には見えない。漢

陽県武昌の西南にある中洲と解説書にあるから近い所にあるにはあるのだろう。

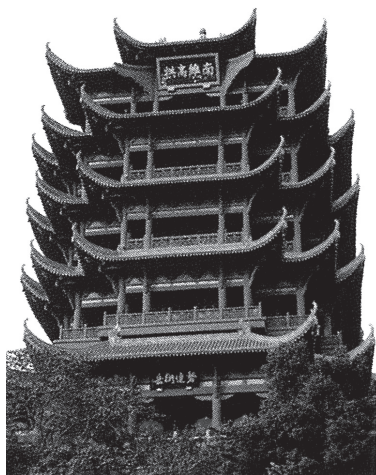
訓読上の三つの疑問

▽その一 「黄鶴」をなぜ「おうかく」と読むのか。

以前から会員の間でこのことは語られている。「伝統だから」らしいが、どの書物にも「くわうかく」こうかく」となっている。「くわう」は漢音で「おう」は呉音である。一般的には漢音を採用することからすれば「こうかく」が正當読みだろう。

▽その二 一句目は「乗白雲」なのか「乗黄鶴」なのか。

「全唐詩」には「乗黄鶴」とあり「唐詩選」「三体詩」には「乗白雲」とある。簡野道明氏の「唐詩選詳解」には「全唐詩」の方を良しとして「……その方がいかにも自然の妙を得ている」と解説し、もとの「白雲」をわざわざ「黄鶴」と改字して載せている。また別の解説書にも「同字を嫌う近体詩であるが、『黄鶴』の二字があえて最初の三句に繰り返されている



ところに奇抜さがある。一句目で黄鶴が去ってしまっているので二句目の『空しく余す黄鶴樓』という表現が効いてくるのである。」とあって、作詩の規則を越えても「黄鶴」の方が趣きがあると説いている。

▽その三 第八句は「人をして愁（うれ）へしむ」と訓読するのでは？ 簡野氏をはじめ大修館書店、明治書院本などにもすべて「愁（うれ）へしむ」である。漢和辞典にも「愁」に「悲しむこと」という字解はあっても、「かなしむ」と訓読するものはない。「かなしむ」と読ませるのも本会の伝統なのかと思う。